

「いじめ」の言説構造とその逆説：「サバルタン」との同型性

八ッ塚 一郎¹*

The discourse structure of *ijime* (bullying) and its paradoxes: Some similarities to the “Subaltern”.

Ichiro YATSUZUKA

(Received October 1, 2015)

1. はじめに

「いじめ」について語れば語るほど、問題の本質が遠ざかり、その解決がいつそう困難となる。言説のもたらす逆説について検討する。社会問題として理解され受容されている「いじめ」現象と、具体的な行為としての「いじめること」「いじめられること」の間には、重大な質的差異、深刻な意味の落差が潜んでいる。その落差を放置したまま「いじめ」問題を記述し語ることで、「いじめ」への対処は、常に原理的に手遅れとなる。さらに、事態を表面的に論じ批判するマクロな言説が膨大に流通することで、社会問題としての「いじめ」解決はいつそう遠ざかる。そこに見られる構造は、資本制と植民地主義の下で少数者が追いやられる閉塞的な状況を論じたスピヴァク『サバルタンは語ることができるか』の指摘と同型である。

「いじめ」や「いじめる」という語の曖昧さ、語感の奇妙さは、多くの論者によってつとに指摘されてきた。その深刻さ、事件性に比して、「いじめ」という語はいかにも軽く不適当であるとの指摘は根強い。特に、犯罪に近い凶悪な事例については、「いじめ」という語では到底足りない、その重さを表現しきれないとの印象も強い。また、行政的用語も含めて、「いじめ」という語の定義が曖昧であることを問題視する論考は少なからず積み重ねられてきた（八ッ塚, 2014a）。

それにもかかわらず、「いじめ」の語はなお用いられ続けている。決して許せるものではなく、といって犯罪には該当しないほどの事例については、「いじめ」と表現するしかなく、「いじめ」以外の語ではその悪質さを適切に表現できない。「ネットいじめ」等の派生語が増えているのも、「いじめ」という語によって

のみ、問題の特徴や深刻さが適格に表現できると思われるからであろう。

「いじめ」の語感とその曖昧さは、新聞記事言説の分析によっても裏付けられている（八ッ塚, 2014a）。十数年来にわたり「いじめ」への言及が増えている。しかしその内実は、特定の時期にのみ、目立つ出来事への言及が極大化しては急減することを繰り返すだけで、社会問題としての持続的な関心は見られない。

その背景にあるのが、動詞「いじめる」の文法的な特性である。「いじめ」という語は、そもそも「いじめること」の実相を適切に表現していない。そのために、関係者が事態を様子見することが常態化し、原理的に手遅れになってからしか対応できない構造に陥っている（八ッ塚, 2014b）。

言説構造に関するこの文法的知見を、本稿では「いじめ」現象の記述と把握、および、マクロな言説流通の2段階に分けて整理する。特に、「いじめ」言説がもたらす効果、その逆説に焦点を当てる。まず、前稿（八ッ塚, 2014b）で指摘した動詞「いじめる」をめぐる問題を再検討する。具体的には、能動性と受動性、および、プロセスと結果をめぐる、行為記述における2つの錯誤として問題を整理する（第2章）。そのうえで、これら2つの錯誤が、当事者・関係者の「いじめ」認識をどのように規定し、適切な対処を妨げるかを考察する（第3章）。さらに、マクロな言説のもたらす逆説へと視点を拡張する。具体的には、評論や報道の流通を通して、ある種の言説が「いじめ」問題の語り方に影響しその内容を限定することで、問題がいつそう深刻化している可能性を摘出する（第4章）。この構造が、スピヴァク『サバルタンは語ることができるか』において指摘された、資本制と植民地主義のもとでの弱者の位置に関する著名な論考と極めて類似

¹ 八ッ塚 一郎：熊本大学教育学部 860-8555 熊本市中央区黒髪 2-40-1

* Yatsuzuka, Ichiro Faculty of Education, Kumamoto University, Kurokami 2-40-1 Kumamoto, 860-8555 Japan

した構造を持っていることを指摘したうえで（第5章）、言説分析の観点からの「いじめ」問題に対する提言を述べる（第6章）。

2. 動詞「いじめる」をめぐる2つの錯誤

「いじめ」という名詞は曖昧で、その語源もはっきりしないと言われる。しかし、「いじめ」という語が文法的にどのような特徴を持っており、どのような制約のもと、いかなるはたらきをもって用いられるのか、その語用法を検討することは十分に可能である。すなわち、原形の動詞「いじめる」に着目し、「いじめる」とはどのような行為であるか、どのような現象が「いじめること」として同定され記述されているかを検討すれば、名詞「いじめ」の意味と特徴も自ずと判明する。ハッ塚(2014b)で着目し分析したこれらの論点を、本章では、能動性と受動性、および、行為の結果とプロセスに関する、2つの錯誤として整理する。

「いじめ」としてわれわれが認識し社会に流通している現象と、実際にそこで進行している行為との間には、決定的な落差、記述と認識における錯誤が、2点にわたって潜んでいる。第1に、「いじめ」という現象は、加害する側と被害を受ける側で、まったく異質な意味合いを持っている。ところが、能動と受動の対として理解すると、その重要な異質性を完全に見落とす。第2に、「いじめ」という現象は、深刻な結果を伴う事態として事後に処理されるものである一方、その渦中においては結果が何ら想定されず、ただプロセスの持続としてのみ認識される。すなわち、われわれは起きてしまってから「いじめ」に対処するだけであって、渦中で進行しているプロセスの実質を、常に取り逃がし続ける。

端的に言えば、われわれは、加害でも被害でもないという「いじめ」の本質を常に見落とし、そして必ず手遅れになってから「いじめ」を認識し対応している。これらは思弁的な空論ではない。「いじめ」という語を無反省に使い続ける限り、動詞「いじめる」の文法的な特性が、必ずこうした作用をもたらす。以下、われわれが「いじめ」の語を使い「いじめ」現象を同定するたびにいかなる効果が発生しているかを検討する。

(1) 能動－受動の錯誤

「いじめ」は、暴力や侵害、時に死をももたらす深刻な被害（「いじめられること」）であり、また、それを引き起こす悪辣な加害（「いじめること」）である。名詞としての「いじめ」現象とは、動詞によって記述

されるこれらの現象の、その総体に他ならない。つまるところ、加害者による能動的な行為が、犠牲者に重い受動的な被害をもたらしているものであり、この構造は決して疑い得ないものに見える。またそれゆえに、われわれは、被害者への心痛と同情、加害者に対する痛憤、両者を放置している学校と教育体制への憤りを感じ、日々活発な議論を交わして膨大な言説を社会に周流させている。

しかし、「いじめ」現象を、加害（いじめること）と被害（いじめられること）からなるもの、能動と受動の総体とみなすのは、日本語の構造を踏まえると重大な錯誤であり、事態の本質を見落とすものである。本来およそ対称的ではないものを、動詞の表面的な形式だけに着目し、対の行為として扱うことが、大きな問題を引き起こす。形式だけを見れば対称関係にあるように見えるが、両者の間には意味の断絶がある。

われわれは教育課程で英文法的な発想に馴染んでいくこともあり、能動と受動を、記述の視点が異なるだけの関係、同じ事態の裏返しに過ぎないものとみなしがちである。しかし、日本語の能動－受動は、「いじめ」に限らず対称的な関係ではなく、本質的な意味の違い、断絶を常に含んでいる。

金谷（2002;2003）によると、日本語の受身文は、単なる能動文の裏返し以上のより広い意味合い、具体的には「コントロールできない状況」「ある状況下での制御不可能性」を表現する。英文法的な発想に立てば、たとえば「AをBが殴る」と「BがAに殴られる」は同値で変わらない。これらは、同じ事態を、ただ視点を変えて裏返しに表現した文に過ぎない。英語の授業で能動受動の書き換え練習が行われるのも、それが単なる形式上の機械的な操作だからである。

しかし、たとえば日本語の「殴られる」は、単に「殴る」を裏返しした以上の意味を必ず帯びている。日本語文における「殴られる」は、単にパンチの受け手となる、といった意味にとどまることは決してなく、それ以上の含意を常に持たされる。たとえば、避けがたくパンチを喰らってしまった、理不尽で一方的な打撃を受けざるを得なかった、それに対して何ら手立てをとれない無力状態に置かれてしまった、などの意味合いが、そこには必ず含まれる。屈辱感や無力感、加害者の横暴さなどといった感情や意味が、必然的に付随すると言ってもよい。

意味が非対称である証拠に、日本語文では、英語のような能動受動の機械的な書き換えを、そのまま実行できない場合がある。たとえば、「ジャイアンが机を殴った」という文は自然にあり得る。しかし、裏返しにした「机がジャイアンに殴られた」は、表現としては奇妙で不自然である。生物ではない机は、行為の対

象になることはあっても、「殴られる状況をコントロールできない主体」にはならない。そのため、形式だけを書き換えても、意味のある文章が成立しない。このように、日本語文の受動形は、単なる能動形の裏返しではない別の文である。

同様に、たとえば「責められる」人は、自分の意志で責め（責任）を引き受けているわけではない。一方的に、むしろ理不尽に追及され、反問すらできない状況に追いやられる人のことを指している。この場合、責めを圧倒する論陣を張ったり、しつこく反撃しようとすることは、不適切でふさわしくない振る舞いとすらみなされる。このように、受動形は「コントロールできない状態である」ことを常に包含する。

「いじめられる」ことも、文字通り、「いじめ」行為を受けて、状況を制御することのできない状態に置かれることをあらわす。それは、単に能動性の対としての状態、逆転や反抗が可能な状態のことではない。そうした積極性や主体性そのものを根こそぎに奪われ、一切を無力化される状態が「いじめ」なのであり、だからこそその犠牲者は悲痛なのだと考えなくてはならない。たとえば、悪口を一方的に言われるが弁解や反論の機会は一切与えられない。金品を強要されても拒絶することすら許されず執拗な暴力にさらされる。このように、反撃可能性をことごとく奪われ続けている無力状態、状況に関する一切の制御可能性を持てない状態に置かれることが「いじめられる」ことである。ネットによる中傷などは、自分で制御することのまったくできない事態の典型ともいえる。

「いじめ」被害者に対して、「やられたならやりかえせばいい、それをしないから舐められるのだ」「無視されたら無視し返せばいいではないか」などとアドバイスを与えたり論評する人はいまも絶えない。ここには、加害と被害を対称的なものと位置づけ、そのバランスを回復することで事態を改善しようとする発想がうかがえる。加害と被害をゼロサム的にとらえる発想と言い換えてもよい。

しかし、加害と被害を対称的に位置づける発想自体が、すでに「いじめる」「いじめられる」という動詞の根本的な意味合いから乖離している。やりかえし言い返そうとすること自体が許されず、それを試みただけでいっそうの暴虐にさらされる状態。そもそもなぜ自分が攻撃され無視されるのかすら説明してもらえない、理不尽でどうにもできない事態。ネット上のように加害者の姿や意図すらわからない状況。「いじめ」の本質とはこのようなものであり、それは動詞のうちに既に明瞭に表現されている。「いじめられる」ことは、「いじめる」ことの単なる対概念ではない。能動形「いじめる」と受動形「いじめられる」は異質な事態を指し示している。

日本語文法の知見に即していえば、能動と受動は、他動詞と自動詞の連続体という大きな構図の中に位置づけて理解されなくてはならない。金谷(2002;2003)、大澤(2010;2015)に即して Figure1 を用いて説明する。

日本語の動詞分類で重要なのは、「人為的・意図的な行為」と、「人間の制御の及ばないこと」との対比である。「人間を中心とし人間が引き起こす事態を表現する動詞」と、「自然を中心とし自然に発生する事柄を表現する動詞」とが対をなしていることが重要なのだと言ってもよい。前者に相当するのが他動詞であり、後者に相当するのが自動詞である(原沢,2012)。

Figure1 に即して言えば、たとえば「教える」ことや「変える」ことは、人間が意図して引き起こす行為(他動詞)である。それに対し、「教わる」ことや「変わる」ことは、外部から影響されて生じ、自身ではないものの作用によって自然に起きる(自動詞)。

自らの制御がまったく及ばず、外部者によってなされ引き起こされるという意味をいっそう強調したものが、自動詞の右端に位置づけられた「受身」である。つまり受動形の表現とは、自らの制御が及ばないという事態を、特に強調した表現であるに過ぎない。たとえば「教えられる」ことや「変えられる」ことは、自分以外の者に動かされ、自然とそう仕向けられること

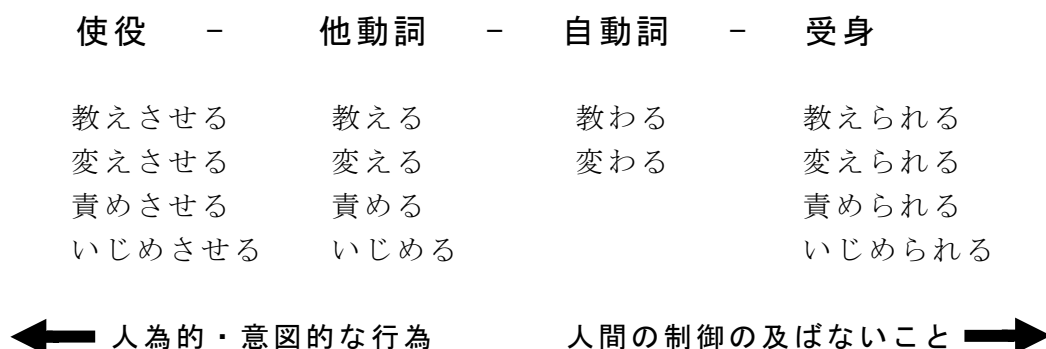


Figure 1. 他動詞と自動詞の連続体

を強調した表現に他ならない。それは、たとえば尊敬する師に導かれ決定的な変化を与えられた、などのポジティブな意味合いも表現し得る。

ちなみに、人間が、さらに他の人間を用いてまで引き起こす行為、いわば人為性の極みが、他動詞の左端にあたる「使役」である。語根の発音体系等も含めたこれらカテゴリーの詳細、および「いじめ」という語の意味とのさらなる関係についてはハツ塚 (2014b) で詳述した。

重要なことは、「いじめる」ことが人為的・意図的な行為にカテゴライズされているのに対し、「いじめられる」ことは、人間の制御の及ばないこと、自然に発生しようしようもないこと、その極致とされる非対称性である。端的に言えば、「いじめ」とは極端なまでに一方的かつ理不尽な行為である。その被害者になることは、一切の力や主体性を失い好き放題にされるということをすら意味する。

それにもかかわらず、形式上は両者が対等であるかのように見えてしまう点に、深刻な問題が潜んでいる。およそ一方的で理不尽な関係性であるにもかかわらず、その一方的で理不尽な関係性すらないことにされてしまう、究極的な一方性と理不尽さ、それが「いじめ」の本質であると言ってもよい。

このような性質をもつ「いじめ」には、さらにもうひとつの錯誤が付随している。Figure1 に示したように、「いじめる」など、いくつかの他動詞には、対応する自動詞が存在しない。次節で見るように、このことは「いじめ」の重大な特徴と結びついている。

(2) プロセスと結果の錯誤

「いじめ」は、時に死をももたらす深刻な被害（「いじめられる」こと）であり、それを引き起こす悪辣な加害（「いじめる」こと）である。名詞としての「いじめ」現象とは、動詞によって記述されるこれらの現象の、その総体に他ならない。こう考えられている。

しかし、実際の「いじめ」現象の進行形の渦中においては、死をはじめとする深刻な結果が生じるなどとは、行為者や関係者の誰も、まったく想定していない。当事者すら、自分がいま深刻な加害を行っているとは意識することが乏しい。これは単なる、関係者の保身や弁解の故ではない。われわれ自身が「いじめる」という行為をそのようにカテゴライズし、それに即して事態と行動を認識しているからである。われわれの社会と言語では、「いじめ」とは結果を想定しないものとして定義されているのだと言い換えてもよい。

Figure1 に示されるように、日本語の他動詞には、対応する自動詞をもつ他動詞（有対他動詞）と、対応する自動詞をもたない他動詞（無対他動詞）がある。

たとえば、

教える (対応する自動詞 教わる),
 変える (対応する自動詞 変わる), また
 割る (対応する自動詞 割れる),
 つぶす (対応する自動詞 つぶれる),

などは、対応する自動詞を有する「有対他動詞」である。それに対し、

いじめる (対応する自動詞 なし)
 責める (対応する自動詞 なし), また
 からかう (対応する自動詞 なし),

などは、受身形こそあるが、対応する自動詞は持たない。これらの動詞のことを、対応する自動詞の無い他動詞、「無対他動詞」と呼ぶ。早津 (1989a;1989b) によると、両者は対応関係にあり、その表現する意味合いは対称的である。すなわち、有対他動詞は、

①対象に不可逆的な変化をもたらす。

教えることや変えることで、相手は前とちがった状態に変化する。あるいはまた、割ったりつぶしたりすると、当該の事物は、もう二度と使い物にならない形状に変化する。このように、有対他動詞は、不可逆的な変化を記述する。

②そのため、当該の行為を反復することができない。

不可逆的な変化がいったん起きてしまえば、同じ変化が重ねて起こることはあり得ない。何かを教わることで決定的に変わった人は、その変化を反復し続けたりはせず別のステップに進む。割れたものやつぶれたものを、繰り返し割ったりつぶしたりすることは、論理的に意味をなさない。

③言い換えると、行為の結果が重要となり常に着目される。

教育の成果を受けてこう決定的に変わった、割れたことでこんなに破片が飛び散ってしまった、など、当該の動詞で記述される行為によってどのような結果が生じたか、いかなる不可逆的な変化が発生したかが、常に重要な関心事となる。

以上の特徴に対して、無対他動詞によって記述される行為は、ちょうど正反対の特徴をもつ。すなわち、

①対象に不可逆的な変化をもたらさない。

無対他動詞によって記述される行為は、対象に決定的な変化をもたらさないと考えられている。たとえば、責めることやからかうことは、相手の本質を不可逆的に変えることではないと定義されており、われわれもそうした認識に従属している。

②それゆえ反復可能性をもつ。

相手の本質が変わってしまうようなことはないからこそ、その行為を何度でも、飽きるほど繰り返すことができる。しつこく責めたり、繰り返しかかったりできるのも、それが致命的な結果をもたらすこと

はないからである。

③言い換えると、結果ではなくプロセスのみが重要で常に着目される

責めることやからかうことは、それ自体が自己目的化しており、その先にどんな取り返しのつかない結果が生じるかは全く想定されない。追及の仕方がどのようなであったとか、いかなるからかいが続けられたかなど、プロセスの様態にばかり関心が向けられる。

以上の特徴は、そのまま無対他動詞「いじめる」にあてはまる。

①「いじめる」ことは、被害者に不可逆的な変化をもたらすことではない。どんなに深刻な加害であっても、それによって相手が決定的に変化することはないものと想定されている。

②それゆえに、本質の変化をもたらさない、ただ不快や苦痛を与える状態だけが、ひたすら反復される。正確に言えば、いつ終わりが来るのかもわからない、しつこくとめどない、執拗な反復可能性にさらされることが「いじめ」の特徴となる。

③反復されるプロセス、不快や苦痛を与える手口・手段の細部ばかりが重要視され、人々の関心事となる。一方で、それによって最終的に何が起きるか、どのような結果がもたらされるかには関心が向けられない。取り返しのつかない事故や死、重大な人権侵害や弁済しようのない損害などの結果が生じる可能性は、行為の渦中では注目されない。

このように、行為の渦中ではプロセスばかりが着目される。ところが、偶発的な事故や覚悟の死など、いったん取り返しのつかない結果が発生すると、無視されていた不可逆的な変化のほうに関心が移行する。取り返しのつかない不可逆的な結果が発生した途端に、有対他動詞による記述と認識の仕方へと、われわれのモードが切り替わってしまうのだと言ってもよい。

「いじめる」行為の渦中では、それがもたらす重大な不可逆の結果、取り返しのつかない事態に関心が及ばない。あるいは、取り返しのつかない結果に目を向けないことで遂行され続けるのが「いじめ」なのだと考えることもできる。一方、決定的な事態が生じた途端に、それまで問題視されてこなかった事項が、ことごとく問題として取り上げられ、記述と言及の対象としてクローズアップされる。端的に言えば、必ず手遅れな結果が発生してから問題視されるという原理的な遅延が、「いじめ」では発生する。

3. 「いじめ」の認識と把握にもたらす影響

以上のような特性と制約をもった「いじめ」という

語によって、われわれの認識と行動がどのように規定され影響されているかを検討する。本章では「いじめ」の当事者・関係者に定位し、「被害者」「加害者」とされる人々がどのような存在として記述され、「いじめ」の語からどのような影響を受けるかを検討する。あわせて、「いじめ」という語が、周囲や教師による「傍観」にどのような効果をもたらすかも考察する。

(1) 「被害者」の理不尽な主体化

前章で自動詞と他動詞の対比に即して述べたように、状況をコントロールする能力を奪われた状態に置かれることが、深刻な「いじめ」の本質である。被害者は、やり返し反撃するどころか、自分の受けている行為が「いじめ」なのかどうかを判定する権限すら奪われる。このような無力化された存在、主体性を奪われた存在として「被害者」を理解しなくてはならない。

「被害者」にとっては、状況から逃げる権利、加害行為を無視して関わりを断つ権利すら奪われている。そもそも「やり返す」など及びもつかない状況に追いやられること、反撃どころか、自分が被っているのは「いじめ」なのかどうか決定する権限すら奪われる状態が、深刻な「いじめ」の実相である。加害者に「いじめではない、からかっていただけだ」「好意でチョッカイを出したのに『いじめ』とは心外だ」など、状況認識や自身の感覚・感情すら歪められてしまう事例も珍しくない。

それにもかかわらず、表面上は、あるいは動詞の形式上は、「いじめられる」ことは「いじめる」ことの対、相関項をなしているように見える。そのため、被害者にも何かできることがあったのではないか、被害者は主体性を発揮せず応分の責任を果たしていないのではないか、といった錯覚が生じやすい。

すなわち、主体性を奪われ、一方的にコントロールされているにもかかわらず、被害者は、あたかも主体であるかのように扱われ、勝手に主体性を投影されてしまう。「いじめ」において真に深刻な事態とは、主体性を奪われているにもかかわらず、歴とした主体であるかのように扱われてしまうことである。

たとえば深刻な「いじめ」事件の被害者に対して、「逃げればいい」「なぜ抵抗しなかったのか」等のアドバイス、あるいは批判が寄せられる場合がある。それどころか、本人の言動に問題があるから「いじめ」られるのだ、本人にも責任はあった、などの弁解や追及がなされる場合もある。これらの言説は、もっともらしいが、重大な欺瞞を含んでいる。

繰り返し述べているように、そもそも逃げる可能性を奪われた状態が「いじめ」である。客観的に見てどれほど逃げ場があろうと、加害者と被害者の関係性が

一方的なコントロールでしかない状態では、「逃げ」の可能性は存在しない。むしろ、逃げようと試みること自体が、反抗的な振る舞い、被害者の分際では許されない行動として、さらなる抑圧や暴力を導き出すほど、状況は閉塞している。

前章で無対他動詞の特性として指摘したように、「いじめ」の行為はとめどなく継続するプロセスである。加害者自身が明確な結果や不可逆的な変化を認識していないのに、状況を制御できない被害者が制止や変化をもたらすことは限りなく困難である。

その絶望的な状況で、唯一選択の可能性として浮上するのが「死」なのではないかと、数多の「いじめ」事例の記録からは推測することができる。死は、不可逆的な変化、取り返しのつかない決定的な出来事である。この変化が起これば、「いじめ」のプロセスは必ず変質する。むしろ、死を選択することは、自身の主体性やコントロールも終わらせる、絶望的な矛盾をはらんだ選択肢であることは言うまでもない。

しかしながら、「いじめ」をめぐる言説は、死者という犠牲者すら、容易に、かつ理不尽に主体化する。一部の論者は、「いじめ」事件の死者、自死を選んだ犠牲者に対してすら、「なぜ生前にやり返さなかったのか」などと要求し、「やり返す力のないことが問題だったのだ」と、死者の責任を主張しさえする。場合によっては、死を選んだ被害者のほうを、それによって生者の名誉を傷つけた、加害者に取り返しのつかないダメージを与えたと形容して、逆に加害者呼ばわりするケースすらある。

そこまでいかななくても、われわれは死を選んだ被害者に対し、「生と死の区別がついていないのではないか」「死を美化し過ぎているのではないか」等、憶測や感情を投影し、その主体的な判断を勝手に推測してしまうきらいがある。われわれは、被害者に同情しその心痛に共感するまさにその瞬間に、被害者の主体性を勝手に構成し、その底のない無力感、とめどなくコントロールを強奪される絶望的なまでの状況から、目を背けているのかもしれない。

(2)「加害者」の空虚

自動詞と他動詞の対比に即して言えば、「いじめ」の加害者は単に状況をコントロールする側にあるというだけの存在である。無対他動詞の特性が示すとおり、加害者は別に、具体的な結果や目的を伴う犯罪行為を遂行しようとしているわけではない。あえて言うなら、継続するプロセスをただ享受し反復しているに過ぎない。それゆえ、「いじめ」の加害者とされる存在は、本質的には空虚で未熟である可能性が高い。

「いじめ」の語義と特性に即して考えれば、人が何

らかの不可逆的な結果を引き起こすことを狙って「いじめ」を行うことはあり得ない。実際の事例でも、計画性と深遠な展望を持った「いじめ」などはおおよそ形容矛盾である。いかに深刻な「いじめ」事件であっても、「相手を殺すつもりで『いじめ』を行った」「財産を残らず強奪することが『いじめ』の目的だった」などと語る加害者は存在しない。数多くの事件において、われわれは、「殺すつもりはなかった」「死ぬとは思わなかった」「悪ふざけをしていただけだった」等の弁解を聞くばかりである。

つまるところ、どれほど極悪に見えても、「いじめ」の加害者は、目的をもった犯罪者ではあり得ない。たまたま状況をコントロールし続けているだけ、その場その場で力を行行使して、一時の快楽や有能感を消費し続けているだけの存在が、「いじめ」の加害者である。明確な目的意識をもった少年犯罪者は、「いじめ」とは別の領域で出現し、「いじめ」事件とは異質な存在として語られる。

見方を変えると、「いじめ」の加害者には当事者意識はない。むしろ、クラスや集団の場をコントロールし、なごませたり維持したりするために、あえて「いじめ」役を引き受けている、とでもいうべき存在に過ぎない。どうしようもない弱い存在としての被害者を、むしろかまってやっているという意識の場合もある。あるいはまた、そうした中心的「加害者」に付和雷同し、コントロールされるよりコントロールする側に回ろうとする者が、周辺的な加害者、「いじめ」を促進しはやしたてる「観客」層を形成する。

これらの「加害者」は、行為の渦中においては加害者であるという自己意識を決して持たず、ただ継続するプロセスを反復し続ける。偶発的に不可逆的な結果が発生し、事態が「いじめ」という曖昧模糊としたものから、殺人や強盗、名誉棄損などの犯罪的事例へと変わることによって、彼らは突如「加害者」カテゴリーに移される。このような「加害者」が、「そんなつもりはなかった」などと弁解すると、われわれは強い憤りを感じる。しかし、突然加害者と名指しされた当事者にとっては、それが偽らざる実感である可能性が高い。

むしろわれわれ自身のほうが、想像を絶する被害者の苦難に対する代償として、加害者を過剰なまでに主体化し、凶悪な存在として記述し位置づけようとしているのかもしれない。そうであるとするなら、たとえば加害者への厳罰化や処罰の強化は、対処の方針としては効力をもたない。それはわれわれの憤りを解消する代償行為であるに過ぎず、「いじめ」の本質には一切関係しない。

(3) 「傍観」の正当化

報道される深刻な「いじめ」事件においては、周囲や教師が何もしなかったこと、事態を傍観し最悪の展開となるまで放置していたことがたびたび論じられ批判されてきた。しかし、事態を傍観し、できるだけ関わりを避けることは、単に無能や怠惰の故ではなく、「いじめ」の言説構造からみれば、むしろ適応的、良心的な行動であった可能性もある。

状況をコントロールできない立場に追いやられること、自身の受けている仕打ちの意味すら適切に認識させてもらえないこと、それが「いじめられる」事態の実相であった。

しかしながら、現代の「いじめ」対処では、「被害者の心情に即すること」が求められ、被害者申告主義のもと、被害者からの訴えに的確に対応することが強く要請されている。主体性を奪われる苦衷に遭遇している被害者に、主体的に状況を認識し訴え出ることを求めるという矛盾が、現代の「いじめ」対処には内在している。

さらに困難なことは、「いじめる」という動詞の性質上、行為の渦中においてはプロセスのみに関心が集中し、不可逆的な結果を同定しにくい点である。苦しい思いが続いている、不快な経験を反復させられていると訴えることはできる。しかし、それによってどのような取り返しのつかない事態が発生するか、このままだとどんな結果が起きるかについては、当事者も、教師を含む周囲の人間も関心を持ちにくく、事態の認識を共有することが困難である。

すなわち、教師を含む周囲の人々は、「いじめ」に対し、関与しなくてはならないのに愚かさや怠惰で関与しないのではない。そもそも「いじめ」が起きているのかどうかかわからない、被害者自身が何も言ってくれないという状態の中で、プロセスを共にし、不可逆的な変化が生じることを共に待ち続けている状態なのだと考えることができる。

象徴的なのは、教師による「様子をみましょう」という言葉である。この言葉にはおそらく、状況の観察を続ける、目を離さず事態を見守り、突発的な異変に対応するという、良心と積極性が含まれている。ところが、「いじめ」として記述される事態の中にあっては、様子を見るとは、プロセスの継続に自身も同調すること、不可逆的な結果ではなく個々のプロセスのほうに関心を向けることである。

外部から見れば明らかに常軌を逸した出来事や、どう見ても被害の訴えとしか取れない発言に対して、教師が文字通り「様子を見る」対応をし、形式的な応答に終始した事例がときに報道され、強く批判されることがある。取り返しのつかない不可逆的な結果を見落

としたという点で、これらの対応には重大な問題がある。しかし、取り返しのつかない結果さえ起きていなければ、これらの対応は、丁寧に「様子を見る」ことを継続した、プロセスに寄り添って子どもの状況を適切に見守り続けた、などとされていた可能性もある。

端的に言えば、不可逆的な結果が生じたら対応しようという、いわば待ちの姿勢を取り、取り返しのつかない結果が生じないことを期待しながらプロセスに寄り添い続けることが、「様子を見る」選択なのだと考えることができる。しかし先述のとおり、取り返しのつかないことが起きてしまったから対応する以上、対応は常に後手に回らざるを得ない。最初から後手を踏むことが前提で、なおかつ取り返しのつかないことが起きない可能性を期待して事態を観察するのであれば、「様子を見る」ことは対応とは言い難い。それはせいぜいが運任せの漂流状態である。だが現状では、国の施策や法律そのものが、被害の訴えが出てからの後付けの対応を推奨する構図となっている。

4. 「いじめ」の語り方に及ぼす影響

前章で述べたように、当事者・関係者の認識や現状把握そのものが、「いじめ」という語の影響とその制約を被っている。さらに、そこから発生する問題をめぐって、マクロな「いじめ」語りの言説が大量に周流し事態を混乱させている。以下、報道や論評など、当事者ではない第三者による「いじめ」言説について、「被害者」と「加害者」の語り、さらに第三者的な「傍観」の発言にどのような影響が生じているかを検討する。

(1) 「被害者」の詐称

「いじめ」の被害者は、自分の置かれた状況を制御できず、苦痛を訴え出るところか、強いられた事態の意味を認識判定する権限すら奪われている。その一方で、自らが被害者であることをことさらにアピールする傾向、被害者であるようには思えない立場の人々が自分の「被害」を訴え出る傾向が、マクロな言説の領域では散見される。

たとえば、以下に引用するのは、閣僚経験者でもある経済学者が、日本の社会状況における今後の教育政策のあり方を語った対談における発言の一節である。「…ですから、格差を拡大したくなければ、これ以上相続税を上げてはなりません。これ以上上限を上げるのは、頑張ってお金を儲けている人へのいじめです」(日経ビジネスオンライン 2015年6月)

広く教育政策を論じる文脈の中にありながら、「いじめ」という語が、喫緊の教育問題とはかかわりなく、

実に無造作に用いられている。ここで「被害者」に擬せられているのは、一定以上の財産を有する層、少なくとも社会的弱者とは言い難い層の人々である。重要なことは、自分たちが被害者である、迫害されていると認識していれば、そのことを「いじめ」という語を用いて公言できるという傾向である。

上述の例はいささか極端だが、「いじめ」をめぐる同様の語り口、自分が被害者であることを積極的に主張する言説は決して少なくない。教育問題としての「いじめ」に限っても、「自分の子どもの頃にも『いじめ』はあった」「自分たちはこうして乗り越えてきたのに今の子どもたちは」といった話形の言説、評論はいまなお珍しくない。

これらの発言にも、掬すべき何らかの知見が含まれている可能性はある。しかし、教育問題にかこつけた昔語り、自分語りの発言、時代状況や制度が違いすぎて軽々には比較検証できない発言の量産は、結果として、被害者の存在を相対的に低下させ、目立たなくする効果をもたらす危険性がある。

むしろ、自身の被害体験を切実に振り返り、過去を物語る言説は、被害の実相を知る重要な手がかりとなる。しかし、前章で述べたとおり、「いじめ」の渦中で自身の置かれた状況を特定することは困難であり、語りとその把握には多大な配慮と検討が必要である。少なくとも、何ら困難さを見せず声高に被害者であることを唱道するような言説には、十分に批判的な検討を加える必要がある。

(2) 「加害」の拡大と正当化

「いじめ」という語が広く普及し浸透する中で、被害の詐称にとどまらず、加害行為をめぐるより恣意的で一方的な言説が拡大している兆候を、あわせて指摘することができる。ネットメディアの浸透を通してこの傾向はいっそう増大しつつある。

一部の芸能人ブログ、政治家ブログ等で、自身が子どもの頃に行った「いじめ」を告白し、むしろ武勇伝のように吹聴する行為が、時に話題となることがある。あからさまな加害や損壊の行為が、少年時代の「やんちゃ」、元気な子どもの「行き過ぎ」などと記述され、内容によってはコメントが「炎上」しサイトの削除、閉鎖がなされる場合もある。

ここにみられるのは、社会的な知名度や発言権を有する人々が、自分の行為を選別し、これは「いじめ」ではない、自身の活発さや有能さの証である等々の価値付けを発信するという事態である。以前であれば、公にならない場での会話、酒席の座興などとして消費され、表面化して来なかったであろう内容が、ネット上で広範囲に拡散し、さらに長期間にわたって公開さ

れ続けるようになったともいえる。

ここでは、対象を一方的にコントロールし、主体性や発言権を独占する行為としての「いじめ」が、ネット媒体の助けも得て、時間と空間を越えて継続し拡大し続けているのだと考えることもできる。発言権を持った者は、自分の「いじめ」を「いじめ」ではないと強弁することができ、逆に「やむを得ない事情」や被害者の「いじめられてしかるべき理由」すら、時空を越えて好きなように発信できる。そうした理不尽で一方的な状況が、すでに現実化していると考えなくてはならない。

すなわち、社会を流通する「いじめ」言説にはすでに相当のバイアス、偏りが発生しており、それらに接する環境にあるわれわれ自身の「いじめ」認識や価値判断も、すでに何らかの制約を受けている可能性がある。そのような認識の下で「いじめ」研究は遂行されなくてはならない。

(3) 「傍観」の恣意性

上記を言い換えると、「いじめ」問題に関する中立的・第三者的立場を無造作に設定することは、もはやわれわれには許されていないということである。新聞記事言説の分析(ハッ塚,2014a)においても、「いじめ」は人間の引き起こす問題であるにもかかわらず、あたかも自然現象、制御できない災害のように語られる傾向が強いことが見出されていた。このような無造作な語り方そのものが、制御できない立場に追いやられた存在のことを、結果的に抑圧している可能性がある。

その意味で、「いじめ」問題を傍観し、あえて第三者的に、ことさらクールな語り口で記述する言説には、さらなる注意が必要である。たとえば、「『いじめ』は日本の伝統のようなもので仕方がない」「大人社会で『いじめ』が横行しているのに子どもの『いじめ』がなくせるわけがない」等、一見冷静で、諦観したような語り口がなされることがある。これらの発言は検討すべき重要な論点を提供するものであるし、また静かで断定的な口調は魅力的でもある。

しかし、このようなクールな語り口は、「いじめ」現象の本質を一方的に決めつけ、語りの状況を支配しようとするものでもある。これらの発言が日本語文でなされているのだとすれば、発言者自身も日本的伝統の影響下にある一員であり、また現に大人社会の構成員でもあるに違いない。そうした存在が、当の伝統や大人社会なるものに対する反省的検討を表明することなく、ただ一方的に「いじめ」問題に言及しているのであれば、それは自己正当化の言説であるとみなすしかない。すなわち、この種の発言は、一方的に「いじめ」の意味を決定し、反問を許さず言説の行方をコン

トロールしようとするものである。言ってみれば、この種の言説は、「いじめ問題」を「いじめ」ているような効果をもつ。

この種の言説は、「いじめ」とは繰り返されるプロセスであること（なくならずまた起きる）、不可逆的な結果をもたらさない現象であること（「日本の伝統」として継続し続ける）、といった側面にもつぱら焦点を当てている。すなわち、これらの言説においては、「いじめ」という動詞と同型の表現で「いじめ」問題が語られ扱われている。

つまるところ、冷静で諦観しているように見える、第三者的な傍観の語り口とは、「いじめ」問題そのものを「いじめる」ような言説、問題を無視し、一方的な圧力や断言を加え、自分の都合のいいように状況をコントロールしようとする言説である。それは、単なる「いじめ」の傍観という以上の積極的・能動的な働きをもつ。この種の言説は、たとえば、「いじめ」問題の無視や矮小化という効果を発揮するかもしれない。あるいは、「いじめ」などはまともに検討する必要もない、くだらない、どうしようもない問題である、あきらめるしか仕方がない問題であるなどと、われわれの価値判断を規定してしまうかもしれない。少なくとも、このような言説が社会を流通し支持を集める状況下で、「いじめ」問題の改善を求めることは難しい。

5. 『サバルタンは語ることができるか』

前章で述べた「いじめ」をめぐるマクロな言説の構造には、スピヴァクの著名な論考との同型性を見出すことができる。「サバルタン」の原義は、植民統治下における抑圧された人々、疎外された人々のことを指す。むろん、社会的に劣位に置かれ抑圧された存在としての「サバルタン」を、「いじめ」の被害者と重ね合わせるだけなら安易で表層的な議論にとどまる。

スピヴァクが検討しているのは、自らの声で語ることのできない存在としてのサバルタンである。すなわち、権利を主張し要求するにあたって、それを主張するための言語を奪われている存在がサバルタンである。植民統治下にある人々は、統治国の言語や文化を習得し、それによって思考し主張することを強いられる。母語と文化に根ざした感情や思考、それを踏まえた社会的権利を要求するにあたって、そのための考察や主張すら、外部から強要された言語に依存しなくては発せられないという矛盾した構造が、ここでは指摘されている。

同書の記述は、本稿で論じてきた「いじめ」の構図と奇妙な類似を見せる。たとえばスピヴァクは、「み

ずから知っていて語ることができ、代表しようにも代表しえないサバルタンの主体といったものは、そもそも存在しない」（訳書 p.44）と指摘する。すなわち、自身の言葉で主体的に自己認識し、自らを固有の存在として語れるような人は、サバルタンではない。

「いじめ」の被害者とは、状況をコントロールする力を奪われた存在であり、自らの被っている攻撃や抑圧が何であるかを認識し判定する権限すら取り上げられている。その意味では、「主体的な『いじめ』被害者」なるもの、自らをそつなくアピールできる「いじめ」犠牲者なるものは、サバルタンと同様に存在しない。

より重要な問題となるのは、第三者のような顔をしてサバルタンに言及する知識人のほうである。つまるところ知識人は、都合の良い特定のサバルタンだけを選んで語っているのであり、「みずからを透明な存在として表象している」（同 p.15）。中立的な第三者として「いじめ」を論じているようでありながら、「いじめ」や「いじめ」被害者について特定のイメージだけを選択しているわれわれ自身も、同様の立場にいる。

同書で分析されているのは、女性の現地住民に対する現地男性の抑圧を、西欧統治国の知識人が批判し解放しようとする構図の欺瞞性である。植民統治下で、忌まわしい伝統習俗の犠牲となって抑圧されている女性を、現地の愚劣な男性たちから解放しなくてはならない。この一見正しい命題が、実際には当の女性たちの発言権を根こそぎに奪い、愚かなうえに従順であるという歪んだ女性像を強要する構図が、同書では摘出されている。

「『いじめ』の被害者」を抑圧する「『いじめ』加害者」を、われわれ、あるいは、教師、周囲の大人、マスコミ、知識人等が批判し解放しようとする構図も、同様の構造と制約のうちにある。「かわいそうな『いじめ』被害者」と「悪質な加害者」なる勝手な像を設定し、透明で中立的な立場から良心的な論陣を張ることによって、当のわれわれ自身が「いじめ被害者」を捏造し、その主体性を損ない続け、権利の回復を遠ざける。そのような構図があり得ることを、スピヴァクの行論から導き出すことができる。

6. 示唆と提言

言説構造に関する以上の分析は、求められる実践のあり方を自動的に導き出す。日本語の言説構造の中で、馴染んだやり方で自然に「いじめ」を語る限り、「いじめ」の深刻化は促進される。「いじめ」を抑止するためには、「いじめ」を語っているときにわれわれが意図せず何を遂行しているかを知ったうえで、では別

の何を語るかを検討しなくてはならない。スピヴァクの言葉を借りれば、「人がそこに住まうことを欲せざるをえない構造を執拗に批判しつづける」(訳書 p.139) ことがまずは必要となる。

ただし、「いじめ」という語を使うなどか、すべて犯罪と呼び変えろといった主張は、勢いはあるが無内容、無価値である。われわれがこれまで何を「いじめ」と呼んできたのか、多様な事例のどこからを犯罪とみなすか等を緻密に分析し、発話者なりの基準を示すのでない限り、こうした主張は意味をなさない。

言説分析の知見を踏まえるなら、まず「いじめ」における能動と受動の思い込みを廃すること、無対他動詞的な記述や認定のあり方を批判し、そこから離れること、この2点が重要となる。

被害者はそもそも、主体性を奪われ、自己の置かれた状況を認識し主張する可能性を持たされずにいる。その被害とは、不可逆的な結果をもたらさないまま、ただプロセスが繰り返されるという形で発生する。

そのような現状に対しては、まずもって、その逆の効果をもつ言説を提示し続けるしかない。マクロに流通する言説の錯誤を批判し続けるとともに、眼前で生じている加害や理不尽を特定し、最悪の結果につながる前にそれを抑止し続けることが、「いじめ」対応の根幹となる。具体的には、

- ・人が一方的に主体性を制限され、コントロール不能な状況に置かれるという理不尽、あるいは、不快の強要や侵害行為などがとめどなく執拗に反復、継続されるという事態を放置しないこと。

- ・そうした状況に遭遇したとき「様子を見る」ことをせず、先手を取って言説と言動を発すること。特に、その事態が継続し続けることでいかなる深刻な結果、不可逆的な事態が発生するかを明示すること。

- ・さらにそれ以前の平常の段階から、不快や苦痛を被る当事者自身が、自分の置かれた状態を表現し主張できるような、語彙と言説を提供し続けること。

端的に言えば、当事者の生々しく未分節な体験から、その先に予想される避けるべき結果を明示し、それに抵抗するための語彙を提供する作業が、多様な領域で

日々展開されなくてはならない。たとえば中富(2015)は、「いじめ」とはどのようなことを指すか、なぜそれが許されないことであるのかを、憲法学と人権意識を基盤に、学生と対話しながら共有する実践の事例を示している。この重要な取り組みは、「いじめ」に対する言説的实践の先駆として豊かなイメージをわれわれに提供する。言説のもたらす矛盾と逆説に対峙し、言葉を使い対話することで必然的に社会変革へと接続する「ことばのアクションリサーチ」(ハッ塚, 2014b)の可能性を、ここからは展望することができる。

参考文献

- 原沢伊都夫(2012)日本人のための日本語文法入門 講談社現代新書
- 早津恵美子(1989a)有対他動詞と無対他動詞の違いについて—意味的な特徴を中心に 言語研究 95
- (1989b)有対他動詞と無対他動詞の意味上の分布 計量国語学 16
- 金谷武洋(2002)日本語に主語はいらない 百年の誤謬を正す 講談社
- (2003)日本語文法の謎を解く—「ある」日本語と「する」英語 ちくま新書
- 中富公一(2015)自信をもっていじめにNOと言うための本 憲法から考える 日本評論社
- 大澤真幸(2010)生きるための自由論 河出書房新社
- (2015)自由という牢獄 責任・公共性・資本主義 岩波書店
- Spivak, G.C. (1988) *Can the Subaltern Speak? in Marxism and the Interpretation of Culture*. University of Illinois Press. (上村忠男(訳)(1998) サバルタンは語ることができるか みすず書房)
- ハッ塚一郎(2014a)新聞記事言説による「いじめ」の社会的な構成と解離：助詞分析による検討 社会心理学研究 29
- (2014b)「いじめ」の言説構造に関する試論：日本語文法論からの視座 熊本大学教育学部紀要, 63